The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	保存と増大 ： 『エチカ』におけるコナトゥスの自己発展性とその必然性について
Author(s)	河村, 厚
Citation	メタフュシカ. 2004, 35, p. 101-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10353
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

保存と増大
― 『エチカ』におけるコナトゥスの自己発展性とその必然性について ―

河村　厚

序

本稿の目的は、スピノザの主著『エチカ』(1675)における、コナトゥス(conatus)概念を概観し、コナトゥスの持つ「必然的自己発展性」という特性を確認することである。コナトゥス概念の『エチカ』での初出は第３部定理６である。しかし、この定理６の直前の２つの定理から、つまり有限様態の自己破壊の不可能性のみから、定理６の「自己保存のコナトゥス」を論証しようとしたら、もう一つの大切な軸となる論証を失ってしまうことになる。つまり、人間も含めた万物に神の力が浸透していることの証としてのコナトゥスという側面が見失われてしまう。そこで本稿は、有限様態の自己破壊の不可能性からの論証にも注意しつつ、やはりコナトゥスは神の無限な力に由来するというもう一つの論証の重要性を再確認し、そのことによって、後者の論証の中から、コナトゥスの持つ「必然的自己発展性」という特性を見出すということを目的とする。またこの「コナトゥスの必然的自己発展性」こそが『エチカ』の倫理学説や社会哲学を考える上で極めて重要な役割を持っているということも最後に示したい。

１　「水平の因果性」の真相

「あらゆる個物、すなわち有限で、定まった存在を有するものはどれも、同様に有限で、定まった存在を有する他の原因から存在するようにまたは作用するように決定されるのでなくては、存在することはできないし、作用をするように決定されることもできない」(E/I/28)というスピノザの言明からは、個物つまり有限様態が自己の存在に固執する必然的傾向性としての「自己保存のコナトゥス」[1]は、他の有限様態との関係からしか論証できないかのように思われる。

しかしスピノザは他方で、「或る作用をするように決定されたものは、神から必然的にそう決

[1] 『エチカ』では、「自己保存のコナトゥス(conatus sese conservandi)」という表現自体は第４部定理 22 （類似の表現は第４部定理 18 備考及び定理４証明）になって初めて現れるが、本稿では第３部定理６と７の「自己の存在に固執しようとする努力（傾向性）」も「自己保存のコナトゥス」として論じることにする。

定されたのである。そして神から決定されないものは自己自身を作用するように決定することができない」(E/I/26)とも、「神はものが存在し始める原因であるばかりでなく、ものが存在することに固執する原因でもある」(E/I/24C)とも言う。ここからは、「自己保存のコナトゥス」は、神を原因として説明することによってしか論証できないかのように思われる。この二つの因果性の間に存在しているように見える矛盾を、スピノザは「限りにおける神(Deus quatenus)」という独特の概念によって解決している(河村,2000,pp.75-79)。それによると、先の「有限な個物を存在や作用に決定する他の有限な個物」とは、実は「定まった存在を有する有限な様態的変状によって様態化した限りにおける神」(E/I/28D)であるから、「各個物は他の個物から一定の仕方で存在するように決定されているとはいえ、各個物がそれによって存在することに固執する力(vis)は、やはり神の本性の永遠なる必然性から生じる」(E/II/45S)ということになる。

ここから判明するのは、「自己保存のコナトゥス」は、有限様態同士の因果関係（水平の因果性）のみでは論証できるようなものではなく、その論証には必ず神の存在を用いなければならないということである。しかし、リンも指摘するように近年の多くの研究者たちは、「自己保存のコナトゥス」定理(E/III/6)の証明における神の存在の重要さを忘却し、それはただ「自己破壊の不可能性」（第 3 部定理 4 と定理 5）のみから論証できる定理であると誤解している(Lin, S.21-22)。そこで次に、そのような解釈の代表であるベネットの説を検討する。

２　「自己保存のコナトゥス」の論証過程における「横滑り」（飛躍）の問題

ベネットは、第 3 部定理 6 の「自己保存のコナトゥス」原理が先行定理より導出される論証過程の不十分さを、定理 6 証明の後半を分析することによって明らかにしている。ベネットによると、この証明後半の中の定理 4 への言及は余計なものであり、真の論証は定理 5 のみから行われている。そこで定理 6 の論証過程を以下に順に示して検討する(Bennett,p.240-242)。

i 「いかなるものも、外部の原因によってでなくては、破壊されえない。」（第 3 部定理 4）

ii 「(a)ものは一方が他方を破壊しうる(*potest destruere*)限りにおいて相反する(*contrariae*)本性を有する。言い換えれば、(b)そうしたものは同じ主体の中に在ることはできない。」（第 3 部定理 5）

iii「いかなるものも、その存在を除去しうるもの全てに対抗する(opponitur)。」(第 3 部定理 6 証明の中で用いられている定理 5 の変形バージョン）

iv「各々のものは、それ自身においてある限り、自己の存在に固執しようと努力する。」（第 3 部定理 6）

v 「各々のものには可能な限り自己の活動力能を増大させようと努力する必然的傾向性がある。」（本稿のコナトゥスの必然的自己発展性テーゼ）

vi「なぜなら、個物はそれによって神の属性が或る一定の仕方で表現される(exprimuntur)様態である（第 1 部定理 25 系により）。言い換えると（第 1 部定理 34 により）、それによって神が存在し、また活動するその神の力能を、或る一定の仕方で表現するものである。そのうえいかなるものも自らが破壊されうるような或るものを、あるいは自分の存在を除去するような或るものを、自らの中に有していない(この部の定理 4 により）。むしろ各々のものは自分の存在を除去しうる(potest tollere)もの全てに対抗する(前定理により）。したがって各々のものは、できるだけ、またそれ自身においてある限り、自己の存在に固執しようと努力する。」（第 3 部定理 6 証明）

ベネットは、iii と iv は同じ事態を意味しているから、ii (a)から、iii と iv が同時に導出されるという論証構造になっていると考えている[2]。この論証過程の中で彼が問題視するのは、ii (a)から iii (iv)への進行には或る横滑りが潜んでいるということだ。つまり、たんなる本性上の「相反する(contraries)」という性質が、いつのまにか「対抗する(opponi)」という全く別の意味へと「横滑り」してしまっているのだ。しかしスピノザは、定理 5 から定理 6 への進行において、ii (b)を自ら拡大解釈して作った（実際は定理 6 証明では不使用の）「定理 5 の強められたバージョン」を念頭においていたので、この横滑り（飛躍）を自覚しなかったとベネットは考える。

ベネットは、ii (b)を「全くもって曖昧な節」と断罪し、「同じ主体の中に在ることができない」のは、「相反する本性」の性質 x と y なのか、それとも「相反する本性」の事物 x と y なのかと疑問を呈した上で、この両方が解釈可能であるとしている。ここで問題が生じる。つまり、ii (b)を「相反する本性」を持つ二つの性質 x、y についての言及であると解釈すると(α)、「同一主体の中に在ること」とは、性質 x、y 各々が「たった一つの事物によって（例）示されること」を意味することになるが、ii (b)を「相反する本性の事物 x、y そのものへの言及であると解釈すると(β)、「同一主体の中に在ること」に対する意味――例えば、x と y はたった一匹の動物の諸器官のような「より大きな或る事物の諸部分である」というような――を新たに考案しなければならなくなるのだ。ベネットによると、定理 5 の証明過程を見れば、ii (b)は、ただ「一つの事物は複数の本性を（例）示しえない（持ちえない）」ということを意味しているにすぎないという解釈が強力な根拠を持つ。これに対して、(β)の解釈をとれば、「x が y を破壊しうる」という事実からは、「x と y はそれらより大きな事物 Z の二つの部分ではありえない」ということが結論されない。この場合、Z は外部からの援助なしに自らの一部を破壊しうることになるが、このことは定理 4 には反しない。なぜなら、自らの一部を破壊することは、自分自身を破壊することではないからだ。定理 5 の証明はこのように説得力のない論証の表明としても読解できてしまうのだ。ベネットによると、定理 6 証明(vi)における定理 5 (ii)の用いられ方は、スピノザ自身による ii (b)の読解はこのようなものであったいうわずかな疑念を残したままにする。

こうして、ベネットの言う「定理 5 の強められたバージョン」とは、「x と y が共に個体（有機体のような何か）であり、かつ y が x を破壊しうる場合、それらのいずれよりもずっと大きな個体でなければ、この x と y は共にそのただひとつの個体の部分ではありえない」というよ

2　アリソンによると、この iii から iv への移行にこそ「不正な横滑り」があるとする批判的解釈が見逃しているのは、『エチカ』における個物はあくまで「活動」の中で捉えられているという事実である。つまり「個物が活動している限り、それを破壊しそうなもの全てに対するこのような対抗(opposition)は、現実＝活動的抵抗(actual resistance)として表現される」し、「個物にとっては、自らを破壊しそうなもの全てに抵抗するように活動することは、自己維持(保存)的に活動することなのである」(Allison,pp.133-134)。またアリソンは、iv と v の間に一見存在するかに思える矛盾(飛躍)も、活動力能を、有機体が自らの環境の中で、他の諸物体＝身体との相互作用を通して、自己の存在(その内部での運動と静止の特有の比・割合)を維持する力つまり生命力として捉えるならば、自己の存在に固執しようとする有機体の努力(コナトゥス)は、その完全性、活動力能、存在力、生命力のレベルを増大させようとする努力(コナトゥス)と全く同じものであることが判明するので、実際は「矛盾」（飛躍）ではないとする。しかしそれだけでは、「コナトゥスの必然的自己発展性テーゼ」への存在論的な説明としては不充分ではなかろうか(Allison,pp.135-136,本稿注 7)。

うなものである。ここでは相対的なサイズの規定が必要になる。つまり、宇宙はスピノザ的な意味での個体であるが、定理 5(ii)は、x が y を破壊しうる場合は、x と y は同じ宇宙の中に共存できないということを意味しないであろう。ではより小さなサイズで考えるとどうか。例えば、y が人物 x を破壊しうるような人物であったとしても、x と y は同じ国家に属することができるであろう。これに対してスピノザは反論するかもしれない。そのような x と y が同じ村や家族に属することは、それらが外部の援助なしに自らを破壊しうるという（村や家族といった）個体にとってはありえない状況を生み出してしまうと。そして、このような「定理 5 の強められたバージョン」から、スピノザは、「y が x を破壊しうる場合は、x と y は常に相互に或る距離を保っていなければならない。それは、もし両者が接近しすぎると、両者はたった一つの個体の内部で結びついてしまい、そのことにより、その個体が自己破壊可能な状態に陥るという危険を冒してしまうことになるからだ」という合理的な推論をしたのだろうと、ベネットは解釈する。そして、ここからスピノザは、x に求められるのは、y との安全な距離を保つということであると推論し、更にそこから、定理 6 証明においては、「先制攻撃はしないまでも、y を寄せ付けないようにしつつ、x は y からの脅威を減じるようなものは何であれ常に行うだろう」という考え方へと滑り落ちて（ii (a)から iii への「横滑り」）しまったのであると(Bennett,pp.240-242)。

３　神の力からのコナトゥスの論証、人間のコナトゥス

上述のように、ベネットは定理 6 証明の後半を「紛れもなく誤った論証」と批判するのであるが、いずれにせよ、彼のような解釈からは神の存在が抜け落ちてしまっている。そして、「自己保存のコナトゥス」定理(E/III/6)を「自己破壊の不可能性」（第３部定理 4 及び定理５）のみから証明しようとすることには初めから無理がある。リンによると、「自己破壊の不可能性」は確かに「自己保存のコナトゥス」定理の証明(E/III/6D)の後半で一定の役割を果たしている。しかし、「有限な個物は神の力能を表現する」という前提からなされる証明前半部分の方がより説得的な論証であり、これによって補われなければ、「自己破壊の不可能性」のみでは決して十分な論証にはならない。というよりむしろ、定理 6 証明前半部分による論証の方が、スピノザにとっては究極的にはより重要であり、コナトゥス原理はこの前提（論証）からの自然で当然な結論なのである(Lin, S.21-22)。本稿はリンのこの主張に全面的に賛成する。ただし、コナトゥスが「持続」の中で、実効的な自己保存力 （活動力能） として現実化されるには、他の有限様態からの働きかけ（限定）が不可欠であることも忘れてはならないであろう（本稿 IV）。以上を踏まえた上で本章では、「自己保存のコナトゥス」を神の力能との関係から論証する。

『エチカ』におけるコナトゥスは、有限様態としての万物に備わっている「自己保存の傾向（努力）」である(E/III/6・D,7・D)。その本質に存在が含まれない有限様態としての個物は、自己の「本質」――それは「現実的本質(essentia actualis)」であると同時に、神から「与えられた本質(essentia data)」である――としてのコナトゥスによって「神=自然」の無限なる力能を「表現する(exprimere)」あるいは「説明=展開する(explicare)」限りにおいてのみ、神の力能（＝本質=存在）を享受して初めて現実的に存在し活動することができる(E/I/24,25C,36D, III/6D,IV/4D)。

このことは、つまり、有限様態の存在と活動の究極的な原因と根拠が「神=自然」の無限なる力能に求められているということである(E/I/24C,II/45S)。

ここで、有限様態としての人間は「自然の一部(naturae pars)」であるから[3]、他の自然の個物と同じく「共通な自然の諸法則」に従い、その感情も全く「同様の自然の必然性と力から」生じる。実はこの「自然の必然性と力」を「表現・展開する」ものこそが人間のコナトゥスである。このように「自然の一部」としての人間にもコナトゥスが当然の帰結として認められることになるのだが(E/III/Ad1Ex,IV/18D)、スピノザは、人間が例外なく「自然の一部」であることの証明を、人間のコナトゥスによって「説明=展開」されることによって有限化・現実化された「神=自然」の力能が元の「神=自然」の無限なる力能の一部分であるという事実から証明している。

> 「人間が自己の存在を保存する力能(potentia)は―中略―人間の現実的本質〔コナトゥス〕によって説明=展開されうる(explicari potest)限りにおける神あるいは自然の力能そのものである（第 1 部定理 24 系、第 3 部定理 7 より）。したがって人間の力能は、それ自身の現実的本質〔コナトゥス〕によって説明=展開される限りにおいて、神あるいは自然の無限なる力能の一部である。」(E/IV/4D)

こうして、人間本性をありのままに見る態度、つまり人間の（意志の）力を特権化し、人間を自然の法則に超越する存在として、「国家の内なる国家」とみなすような見方を徹底的に拒絶し、人間をあくまで「自然の一部」とみなすスピノザの態度は、「自己保存のコナトゥス」という万人共通の自然本性(E/III/9,58D,Allison,p.134)への洞察に支えられていることが判明する[4]。

以上に考察したのは、存在論的位相におけるコナトゥス、つまり「自己保存のコナトゥス」であるが、このコナトゥスは、人間にあっては、現実生活におけるさまざまな位相において、「活動力能(potentia agendi)」という現実的な力能として現れるようになる。活動力能という現実的な力として現れた＜限りにおけるコナトゥス(conatus quatenus)＞は、例えば認識という位相においては「認識能力」であり(E/III/37D,59D,IV/26D)、感情という位相においては「欲望」であり(E/III/9S,58D,Ad1Ex,IV/18D)、社会（政治）という位相においては「自然権」である (E/IV/37S1,TP/II/5)。 ここで重要なのは、このような活動力能として現れた＜限りにおけるコナトゥス＞にはその「増減可能性」が認められ[5](E/III/37D,43D,57D,河村,1997,pp.31-36)、人間にとっては、自己のこの活動力能を可能な限り増大させようとする恒常的な傾向性がその本性の必然

---

3 (E/ IV /2,4,57S,Ap6・7・32,TP/II/5・8,TTP/III/32,IV/44,XVI/191)

4 「私はこれら一切を人間の本性（それがどのように考えられようと）の必然性から、すなわち万人に普遍的な自己保存のな自己保存のコナトゥス(conatus sese conservandi)から証明したということである。そしてこのコナトゥスは無知なる者であろうが賢者であろうが全ての人間に内在する」(TP/III/18)。

5 ただ、ここで留意すべきは、各様態(各人)のコナトゥスそのものには、増減はありえないということである。よって次章で考察するような「コナトゥスの必然的自己発展性」とは、コナトゥスそのものの量的拡大を意味しはしないのである。

性であるという事実である。

４　「コナトゥスの自己発展性とその必然性」

自己の存在を全力の限りを尽くして維持･保存しようとする人間の努力(コナトゥス)は根源的欲望にして、人間の本質であった。しかし、以下に引用する『エチカ』第 3 部感情理論の二つの定理を、それが導出される証明の筋を遡りながら考察すれば、単に感情理論的な含意を有したものであるに留まらない存在論的にも極めて重要なコナトゥスについての或る事実が浮かび上がってくる。

「我々は、喜びに寄与すると我々が想像（表象）する全てのものを促進＝実現しようと努力する(*conamur promovere*)。反対に、それに矛盾しあるいは悲しみに寄与すると我々が想像（表象）する全てのものを遠ざけあるいは破壊しようと努力する。」(E/III/28)

「悲しみは人間の活動力能を減少させあるいは阻害する―中略―人間が自己の存在に固執しようと努力するコナトゥスを減少させあるいは阻害するのである。したがって悲しみは（この部の定理 5 により）このコナトゥスに相反するものである。そして悲しみによって触発されている人間が努力する(conatur)ことの全ては、悲しみを除去することに向けられる。―中略―それゆえ悲しみがより大きいに従って、人間はそれだけ大きな活動力能をもって悲しみを除去しようと努力するであろう。―中略―喜びは人間の活動力能を増大しあるいは促進するから、喜びによって触発されている人間は喜びを保存することを何よりも欲し、しかも喜びがより大きいに従って、それだけ大きな欲望〔コナトゥス〕をもってそれを欲する。」(E/III/37D)

今ここに示した二つの定理は――最初の定理中の「想像（表象）する」という言葉からも分かるように――（少なくともその瞬間には）「受動感情に隷属している人間」の特性について述べたものである(E/III/57S)。この第 3 部定理 28 からは、受動的人間には、単に自己の存在を維持・保存する傾向性だけではなく、自己に「喜び」をもたらすようなものを可能な限り獲得しようと努力し、「悲しみ」をもたらすようなものを可能な限り破壊しようと努力する傾向性があると、スピノザは考えているということが明らかになる。定理 28 では、受動的人間のこのような傾向性は、「精神は身体の活動力能を増大しあるいは促進するものを可能な限り想像（表象）しようと努力し(conatur)」、「身体の活動力能を減少しあるいは阻害するものを想像（表象）する場合、そうしたものの存在を排除する事物を可能な限り想像しようと努力する」(E/III/12,13)という定理まで遡ってそれを根拠に証明されている[6]。ここには、「喜び」は人間（精神と身体）の活動力能（自己の存在に固執しようとするコナトゥス）を増大・促進し、「悲しみ」は逆にそ

[6] ここには或る種の「飛躍」がある。つまり定理 12,13 では単に「想像(表象)しようと努力する」であったのが、定理 28 では「促進(実現)あるいは破壊しようと努力する」に発展しているからだ。しかし、これらの両定理の証明にはいずれも「心身平行論」が強く効いており、「飛躍」はみせかけにすぎない(木島,pp.108-112)。

れを減少・阻害させるような感情であるという、「喜び」、「悲しみ」、活動力能（コナトゥス）の三者の関係についてのスピノザの考え方(E/III/37D,57D)を補って考えなければならないであろう。つまり、人間が喜びをもたらすものを促進・実現しようと努力するのは、「喜び」が自己の活動力能（コナトゥス）を増大・促進させる感情であるからであり、悲しみをもたらすものを遠ざけあるいは破壊しようと努力するのは、「悲しみ」が自己の活動力能（コナトゥス）を減少・阻害させるような感情であるからなのだ。けれどもここから更に、では人間が活動力能（コナトゥス）を増大・促進させるものを求め、活動力能を減少しあるいは阻害するものを回避し破壊しようと努力するのはなぜかが問われなければならない(E/III/12,13,37D)。それをスピノザは、この第 3 部定理 12 の証明後半において、「精神が我々の身体の活動力能を増大しあるいは促進するものを想像（表象）する間は、身体はその活動力能を増大しあるいは促進するような仕方で触発される（この部の要請 1 を見よ）。したがってまた（この部の定理 11 により）その間は、精神の思惟能力は増大しあるいは促進される。それゆえに（この部の定理 6 または 9 により）精神はそうしたものを可能な限り想像（表象）しようと努力する」というように、定理 6 つまり「各々のものは、それ自身においてある限り、自己の存在に固執しようと努力する」(E/III/6)という「自己保存のコナトゥス」定理とそれを精神に適用させた定理 9 にまで遡らせて証明している。

しかし、この単に「自己の存在に固執しようと努力する(in suo esse perseverare conatur)」傾向性から、「活動力能として現れた〈限りにおけるコナトゥス〉」の減少をもたらすようなものに可能な限り抵抗し、その増大を可能な限り求めようとする傾向性が証明されているのはなぜだろうか(Allison,p.135)[7]。ここでは二つの点が重要である。その第一点は、「各々のものがそれによって単独であるいは他のものと共に(cum aliis)或ることを行い、あるいは行おうと努力する(agere conatur)力能ないしコナトゥス、言い換えれば（この部の定理 6 により）、各々のものがそれによって自己の存在に固執しようと努力する力能ないしコナトゥスは、そのもの自身の与えられた本質あるいは現実的本質にほかならない」(E/III/7D)と述べられているように、スピノザが言う「自己の存在への固執」とは、ただ自己の存在や状態を最低限度に維持・保存するというものではなく、「活動すること(agree)」しかも「自己以外のものと協働して活動すること」までをも本来的に含意するような概念であるということである(Allison,pp.133-134)。

第二点は、その本質には存在することが含まれない有限様態としての個物が(E/I/24)、この「自己の存在へ固執しようと努力する傾向性」を持つのはなぜかという問題を考える中で明らかになる。この問題に対する証明は――本稿 II と III で見たように――人間も含めた有限なる個物は、外部の諸原因を考慮せず「それ自体で見られる限り」、自らを滅ぼすようなものを自己の内

---

7 アリソンによると、人間も含めた有限様態は全て「ただ自らの存在の現実的＝活動的レベル(actual level)を保存するだけのために、自己の力能を増大させようと絶え間なく努力しなければならない」という問題については、スピノザは、ホッブズの『リヴァイアサン』第 1 部第 11 章の、人間が力を求めることを止めないのは「彼（人間）が現在持っているよく生きるための力と手段を確保しうるためには、それ以上〔の力〕を獲得することが不可欠だからである」という思想から影響を受けている(Allison,p.136,p.235,n.13)。しかし、アリソンのこの説明は存在論的な基礎づけが余りにも乏しい（本稿注 2）。

には一切有せず(E/III/4・D,5)、神から「与えられた本質」としてのコナトゥスによって、神が存在し活動しているその永遠で無限なる力能を「表現する」ことで存在し活動している様態であるということを根拠にしてなされていた(E/III/6D,7D,cf.I/21,IV/4D)。この一連の論証過程から帰結されるのは、有限様態を「自己の存在に固執しようとさせる駆動力としてのコナトゥス」は、「限定された(finitum)時間ではなく無限定な(indefinitum)時間を含んでおり」(E/III/8)、各有限様態は外部の原因によって妨害されることがなければ、現に有しているのと「同一の力能(eadem potentia)」を持って常に存在し続け(E/III/8D,IV/Prae)、外部の原因によって妨害されれば、その妨害の原因となるものに可能な限り「対抗・抵抗する(opponi)」ということである(E/III/6D)。

そして、神から「与えられた本質」であるがゆえに、「それ自体で見れば」絶対的な自己肯定でしかありえなかったこのコナトゥスによって表現・展開されることによってのみ、神の永遠で無限なる力能は有限様態自身の現実的な自己保存力（活動力能）となるのであるから(E/IV/4D)、コナトゥスによってなされ、コナトゥスそのものがその証しとなっている「有限様態の内への神の無限なる力能の浸透」には、「それ自体で見れば」限界はありえない。つまり、神の無限なる力能の浸透に、当の有限様態自身によって或る限界を設定するということは、上に見たコナトゥス（＝与えられた本質）そのものの「絶対的自己肯定性」という性質上、不可能なのである。

しかし、「自己保存のコナトゥス」のこの無制約の「絶対的自己肯定性」は、あくまで外部の諸原因を考慮せず「それ自体で見られる限り」という条件の中でのみ有効であることを忘れてはならない。現実には、有限様態（としての人間） は、有限様態同士の相互作用のただ中においては(E/V/37S)、外部の諸原因（自己以外の有限者）から二重の意味での「限定」を受けて存在しているのである。その第一の限定とは、有限様態は他の有限様態から「存在と作用へと決定（限定）される(determinari)」ことによって初めて現実に存在することができる[8]という肯定的「限定」である(E/I/28)。第二の限定とは、有限様態が自己の存在へ固執する力は、それを無限に凌駕する外部の原因の力によって「境界確定（限定）される(definiri)」から、有限様態（としての人間）の（自己の存在に固執する）力は、常に外部の原因によって破壊される可能性に晒されているという否定的「限定」[9]である(E/IV/Ax,2-6)。このような二重の「限定」によって、コナトゥスそのものの「無制約性」に制限が加えられ、そのことによって初めて、コナトゥスは「持続」の中での自己の存在への固執の努力・傾向として「現実化」[10]されるのである

---

8 もちろん、個物がこのいわゆる「水平の因果性」の中で、他の個物から存在と作用へと「決定（限定）」されているということは、「垂直の因果性」において「限りにおける神」から存在と作用へ「決定」されているということと同一事態である(E/I/26-29,本稿 I)。

9 ただし、この外部からの否定的「限定」に対する、各々の存在の「対抗・抵抗」を、「否定の否定」と捉えて、むしろこの外部からの否定に対する対抗(否定)によって初めて、コナトゥスは時間(持続)の中で現実化されるとするヴァルターのような解釈もある。本稿注 12 を参照。

10 ここに「各々のものが、それによって自己の存在に固執しようと努力するコナトゥスはそのもの自身の現実的本質(*actualis essentia*)にほかならない」(E/III/7)と言われる場合の「actualis(現実的)」の意味を見て取ることもできよう(本稿注 14 参照)。しかし先に引用したこの定理の証明(E/III/7D)を見れば一目瞭然のように、この“actualis”は、「行う・活動する(agree)」力能というコナトゥスの側面を表現してもいるという意味でも「actualis (活動的)」であるのだ。そもそもコナトゥスが「与えられた、あるいは現実的＝活動的本質

(E/III/8D,IV/Prae)。

このうちの二番目の、否定的「限定」が与えられれば、それに可能な限り「対抗・抵抗する(opponi)」というコナトゥスの必然的傾向性を人間の場合で説明したのが、本章冒頭に提示した第 3 部定理 37 証明の前半である。この証明前半では、まず人間のコナトゥスがそのコナトゥス（活動力能）自身を減少・阻害するもの（悲しみ）の除去に向かうのはなぜかということが論証されていなければならないはずだが、スピノザは、第 3 部定理 5（「ものは一方が他方を破壊しうる限りにおいて相反する本性を有する。言い換えればそうしたものは同じ主体の中に在ることはできない」）を挙げて、コナトゥスに「相反する(contraries)」という悲しみの性格を示しているに過ぎない。しかし、この論証を完全なものにしようと思えば、スピノザは更に、第 3 部定理 6 証明の中の「（前定理により）いかなるものも、その存在を除去しうるもの全てに対抗する(opponitur)」という「第 3 部定理 5 を語りなおしたテーゼ」を論拠として持ち出すべきであったろう[11]。そうすることで初めて、そのコナトゥス（活動力能）自身を減少・阻害させ、その者を破壊しうるようなもの、つまり自らに「相反するもの」に、人間のコナトゥスは可能な限り抵抗・対抗し、それを必然的に除去しようとするという事実[12]と、その阻害要因（悲しみ）の大きさに比例して、それに抵抗・対抗するコナトゥス（活動力能）の大きさも増大するという、両者の間にある緊張関係と「弁証法的」ダイナミズム[13]が明らかにもなるのだ。

(data,sive actualis essentia)」(E/III/7D)であると言われる場合の、神から「与えられた(data)」という事態は、個物の側から捉えるならば――この証明が参照を促す第 1 部定理 36 のその証明からも明らかなように――有限な個物が神の「存在し活動する」力能＝本質を「表現する」ことによって、神のその力能を有限のレベルにおいて享受しているという事態である。ここで、神においては、存在することと活動することは同じくその本質であるから（「神の活動的本質(Dei actuosa essentia)」）(E/I/34D,II/3S)、「与えられた本質」は「活動的本質」でもあるのだ。

11 第 3 部定理 6 証明中の、この「相反する」から「対抗する」への横滑りについてはすでに本稿 II で述べた。

12 確かに『エチカ』ではいかなるものも「その存在を除去しうるもの全てに対抗する(opponitur)」(E/III/6D)という、「自己」に対する「他者」あるいは「外界」からの脅威とそれへの反発という緊張関係の事実が、「自己保存のコナトゥス」の証明には示されている。ここではヴァルターの弁証法的なコナトゥス解釈を紹介する。ヴァルターは、コナトゥスを否定の否定として、また差異における同一性として見ている。ヴァルターによると、「〔各々の〕ものは、外的な作用によってそのものを除去しようとする企てに、その本質＝存在(Wesen)の実在性によって抵抗する。存在を脅かしている外的な原因からの作用を断固として否定することによって初めて、本質＝存在は、時間的に存在する個体のうちで、自己保存の努力あるいは固執の努力、つまりコナトゥスとなる。―中略―現実的本質あるいは与えられた本質(vgl. EIII,7,dem;146,29)という概念において、存在を否定する作用の否定として具体的に与えられた本質(Wesenheit)がコナトゥスである。それゆえ、コナトゥスという概念のうちには、本質＝存在と存在する個体との差異と同時にそれらの同一性がある。―中略― 存在している個体は、確かに存在しているものとしてのその個体とその個体の本質＝存在との差異であると同時にそれら両方の同一性へ向けての努力である」(Walther, S.102-103)。

しかし、ヴァルターのようにコナトゥスの「否定の否定」という側面のみを強調した弁証法的な解釈をとると、「自己の存在に固執する努力としてのコナトゥス」の定理の証明(E/III/6D)のうちの半分を全く見落としてしまうことにならないだろうか。つまり、本稿 III 及び本章でも示したように、有限様態の存在と活動の究極的な原因と根拠が「神=自然」の無限なる力能に求められているというコナトゥスの「直接的肯定性」の側面を看過してしまうことにならないだろうか(E/I/24C,II/45S)。

13 ドゥルーズによるコナトゥスの第三の規定。神から「与えられた本質」としてのコナトゥスそのものは増減も変化もしない。しかし各個物、各人の「現実的本質」であるコナトゥスが、他者との関係の中で現実に発揮されたものとしての「活動力能」は増減し、「より小さなあるいはより大きな完全性への移行」は存在する。ドゥルーズは、コナトゥスに三つの規定を設けることでこのような複雑な事態を丁寧に説明する(Deleuze,pp.135-143)。「第一の規定」(力学的(メカニック)定義):自己の存在への固執・維持・保存の傾向(E/IV/39)。「第

しかし、コナトゥス（活動力能）に対する阻害因子へのそのようなダイナミックな「抵抗・対抗」も、コナトゥス（活動力能）に対する促進因子へのコナトゥス自身のポジティブな獲得反応も(E/III/12,13,37D)、コナトゥス自身の「絶対的自己肯定性」という性質から生じている。ここで重要なのは、このコナトゥスの「絶対的自己肯定性」という性質が、神の永遠で無限な力能にその起源を持ったということである。私は先に、「有限様態の内への神の無限なる力能の浸透」という表現[14]によってこの事態を表した。この表現が意味するのは、人間も含めた有限様態のコナトゥス（活動力能）の淵源が神の永遠で無限な力能にある以上(E/I/24C,II/45S,IV/4D)、有限様態（人間）の側に何らかの「阻害要因」（拒み）がない限りは、この「神の無限なる力能の浸透」は止むこと（限界）を知らないはずであり、その限りにおいて、有限様態（人間）の側での神の力能の「表現」が最高度に行われ続け、それによって有限様態（人間）の活動力能として現れた〈限りにおけるコナトゥス〉も最高度まで上昇・増大し続ける[15]であろうということである(cf.Schrijvers,p.69,pp.76-77)。しかし実際は、人間の場合は特に、さまざまな促進因子や阻害因子との「偶然的出会い＝遭遇」に晒されて存在し、生きる中で(E/II/29S)、この「浸透＝表現」の達成に制限が課せられてしまう。この制限は各人によって異なるし、また同一人物

二の規定」(力動的定義(ディナミック)):触発に対する「適応能力＝適応度(aptitude)」を維持し最大限に発揮しようとする傾向(E/IV/38)。「第三の規定」(弁証法的定義(ディアレクティック)):喜びをもたらすものを実現して活動力能を増大させようとし、悲しみをもたらすものを遠ざけ破壊しようとする努力(E/III/28)。

14 Schrijvers はコナトゥスの本質的特徴の一つとしてその「拡張性(expansivity)」を挙げ、それを「圧縮されたバネ」の比喩で表現している。彼の解釈は本稿との共通点も多いので、以下に簡単に紹介する。Schrijvers によると、個物はその本質に存在が含まれないというテーゼは(E/I/24C)、本質だけでは存在の十全な原因にはならないということを意味しているに過ぎない。個物はその存在の根拠を「外的原因」と「内的原因」の協力に負っている。例えば画上に円を描くには、道具や身体だけでなく円の本質についての観念が必要なように。内的原因は個物の本性＝本質を、永遠のこのかたそれがそうであるかのように規定(限定)するから、個物は、それ自体で見られる限り、否定性(可滅性)を含まず、むしろその「永遠の本質」によって「現実化」を求めている。ここから、現実性に固執する力としてのコナトゥスの究極の正当化が生まれる。しかしこのことは、「永遠の本質」が「現実化」へ向けて努力するということを意味しない。コナトゥスは「永遠の本質」のレベルでは正当化されないのだ。神の永遠なる存在力を表現するものである個物は、「現実に」存在し始める限りにおいてのみ、まさにその瞬間に、保存を切望するようになり、自己の存在に固執するコナトゥスとして現れるのである。コナトゥスが「現実的本質」である所以は、個物の永遠なる存在力は、現実においては、自己を破壊しうるような他の個物との終わりなき闘争に対応しているからである。つまり、個物の現実存在の内的な保証人としてのコナトゥスは、外部からも規定(限定)されるということだ。現実化のための必要条件を本質によっては満たせないので、個物は外的な力の諸条件へと開かれたままであるように内的に強制されている。その中には、自己を破壊しうるような強大な力もあることになる。しかし、定義上、個物に課せられる限界内で、個物の永遠なる力能は「存在の絶対的肯定」として自らを発揮する。この「存在の無条件(無制約)の内的肯定」は、現実には、外部から完全に規定(限定)されてもいるのだが、この事態を「圧縮されたバネ」のイメージによって視覚化できよう。この「圧縮されたバネ」は内部から拡張していく力を持つが、その場合の拡張の実効的な範囲は――それがポジティブなものであれネガティブなものであれ――外的な諸要因に依存しているのである。こうして、個物が、そうするように内的に規定(限定)されたことに、好ましい外的条件の下で成功した瞬間は、自己保存の成就が同時に拡張的な運動にもなっているというような瞬間であることが分かる。「より多く(more)」への欲望、つまり存在力の最大化への欲望は(E/III/28,IV/38)、ガリレオの慣性原理に基づいて完全に説明できるのである(Schrijvers,pp.66-69)。

15 第 3 部定理 5 において、一方による他方の「破壊」可能性として語られた「相反する(contraries)」という性質は、後続箇所では「活動力能(自己保存のコナトゥス)の減少・阻害」をもたらすものとして語りなおされている(E/III/37D)。このことが意味するのは、活動力能を減少・阻害させるようなものは、決して各々のもの(有限様態)それ自身の内には存在しえないということである(E/IV/30D,cf.III/4,5)。

でもそのつど異なる。これが、活動力能として現れた〈限りにおけるコナトゥス〉の各人における度合いの相違とアポステリオリな増減可能性として現れてくるのである。

こうして「自己保存のコナトゥス」定理(E/III/6)から、自己の「活動力能として現れた〈限りにおけるコナトゥス〉」を可能な限り増大させようとする、コナトゥスそのものが有する必然的傾向性が導き出されることになる。そしてこれが有限様態としての人間に適用されたものが、以下に私が「コナトゥスの必然的自己発展性＝エゴイズムの原理」と呼ぶものである。

５　「コナトゥスの必然的自己発展性の原理」の倫理学、社会哲学への適用

第４部に入ってからスピノザは、この「コナトゥスの必然的自己発展性＝エゴイズムの原理」から直接に、「各人はその善あるいは悪と判断するものを自己の本性〔コナトゥス〕の法則に従って必然的に欲求しあるいは忌避する」(E/IV/19)という定理を導き出しているが、そこから更に、「真に徳に従って働きをなす(agere)とは、我々においては、理性の導きに従って働きをなし、生き、自己の存在を保存すること（この３つは同じことを意味する）、しかもそれを自己に固有の利益を求めるという根本原則から行うことにほかならない」(E/IV/24)とも言っている。ここに言う「自己に固有の利益を求める根本原則」は、別の箇所では「各人は自己の利益を求めるようになっているというこの原理」(E/IV/18S)とも表現されているが、これらは「コナトゥスの必然的自己発展性＝エゴイズムの原理」が、「理性の導きに従って生きる人間」の場合にもそっくりそのまま持ち越されていることを示すものである[16]。この原理が「受動感情に隷属する人間」のみならず「理性の導きに従って生きる人間」にも妥当するのは、コナトゥスが、理性によって導かれるか（能動）、感情に従属しているか（受動）にかかわらず、言い換えれば「賢者」であるか「無知なる者」であるかにかかわらず万人に普遍的に内在する人間の「自然本性＝本質」である[17]からだ(E/III/9,58D, TTP/XVI/189-190, TP/II/5・8,III/18,Allison,p.134)。

以上から、『エチカ』では、受動感情に隷属していようが、理性の導きに従って生きていようが、各々の人間は、単に自己の存在を最低限に維持・保存しようとする傾向性だけではなく、自己にとっての「善(bonum)」、つまり自己に「有益で(utilis)」あり、「喜び」をもたらし、自己の「活動力能として現れた限りにおけるコナトゥス」（欲望）を増大させてくれるものを(E/III/12,13,28,37D, 39S,IV/D1・2,8D,18D,19,29D)、可能な限り獲得しようと努力する傾向性を有

16　ただし理性人にとっての「自己利益」とは受動人のそれとは質的に異なるものであり、そこからは「利他的行為」や「社会形成」の可能性が生まれるようなものである(E/IV/35C1,37・S1,71D,Ap4)。

17　しかし、自己認識との関係で見た自己保存(のコナトゥス)は、受動的人間と理性的人間では大きく異なる。ヘンリッヒによれば、自己意識と自己保存の統一というストア派の基本モチーフこそが、西欧の近代哲学の基本構造を規定した。ストア派によると、「自己熟知(Vertrautheit mit sich)によって初めて人間の自己保存の可能性は生まれ、自己保存を行う限りにおいてのみ人間は自己を熟知している」(Henrich,S.114)。このように自己意識と自己保存という二つの「反省的＝再帰的 reflexiv」関係は相互的連関のうちにある相互依存関係なのである(ibid.S.120-123)。果たして、これはスピノザの「自己保存のコナトゥス」にも当てはまるだろうか。スピノザ自身は、「受動感情に隷属する無知なる者」は自己自身を知らないままに自己保存を行っているが、「理性的人間」は自己自身を十分に知った上で自己保存を行っていると考えている(E/IV/56D)。後者の自己認識には、「共通概念」による、自己と自己以外のものに「共通なもの」、つまり自己にとって有益なものの認識も含まれる。ただし自己の「個別的本質」を真に認識するには「直観知」を待たなければならないであろう(E/IV/D1,30,31,V/24,25D,36S)。

していると考えられていることが判明した。

また、自然権をコナトゥスによって規定している『政治論』にもこの「コナトゥスの必然的自己発展性＝エゴイズムの原理」は適用される。というよりむしろこの原理は、『政治論』における国家形成に存在論的説明を与えてくれるようなものなのである。こうして「コナトゥスの必然的自己発展性の原理」は、『エチカ』の倫理学説における諸問題を考察する際にも(河村,2000,2001)、スピノザ社会哲学における社会化の問題を考察する際にも(河村,2004)、極めて重要な、或る意味でそれらの支柱となるような原理なのである。

〈文献表〉

スピノザのテクストはゲープハルト版全集(*Spinoza Opera*,im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften hrsg. von Carl Gebhardt, C. Winter, 1925)を用い、引用に際しての略号は慣例に従った。略例を以下に示す（本稿文中の下線による強調、〔　〕による挿入は全て、著者河村による）。

(E/IV/57S2)=『エチカ』第４部定理 57 備考２。　(TP/II/5)=『政治論』第２章第５節。

(TTP/XX/240)=『神学政治論』第 20 章 240 頁。　(EP/19)=『往復書簡集』第 19 書簡。

Allison,H.E., *Benedict de Spinoza :An Introduction*, Yale University Press,1987.

Bennett,J., *A Study of Spinoza's Ethics*, Hackett Publishing Company,1984.

Deleuze,G., *Spinoza :Philosophie pratique* ,Minuit,1981.

Henrich,D., *Selbstverhältnisse :Gedanken und Auslegungen zu den Grundlagen der klassischen deutschen Philosophie*,Reclam,1982,1993.

Lin,M., “Spinoza's Metaphysics of Desire:The Demonstration of IIIP6, in :*Archiv für Geschichite der Philosophie*, 86Band,Walter de Gruyter,2004.

Schrijvers,M., “The *Conatus* and the Mutual Relationship Between Active and Passive Affects in Spinoza”, in :*Desire and Affect : Spinoza as Psychologist*,ed.by Yovel,Y.,Little Room Press,1999.

Walther, M.A., *Metaphysik als Anti-Theologie*, Felix Meiner,1971.

河村厚,1997,「コナトゥスから救済へ―スピノザにおける救済の根底的基礎としてのコナトゥスについて―」『待兼山論叢』31 号,大阪大学文学会,1997 年.

河村厚,2000,「コナトゥスをめぐる二つの倫理学―レヴィナスのスピノザ批判に対して―」,『HUMANITAS』第 25 号,奈良県立医科大学一般教育紀要,2000 年.

河村厚,2001,「スピノザ『エチカ』における利他的行為の可能性について」,日本倫理学会　第 51 回大会研究発表原稿,2001 年 10 月 14 日, 於東京大学.

河村厚,2004,「スピノザ社会哲学における国家成立の問題―『エチカ』と『政治論』の連続と不連続―」,『政治哲学』第２号 ,レオ・シュトラウス政治哲学研究会,2004 年.

木島泰三,2003,「スピノザの人間論における『目的』概念の適正な定位―『エチカ』第 3 部定理 12 と定理 28 の検討」,『スピノザーナ：スピノザ協会年報』第 4 号 ,スピノザ協会,2003 年.

（かわむらこう　関西大学法学部非常勤講師）

Preservation and Increase

— On Self-development of *conatus* and its necessity in Spinoza's *Ethica* —

Koo KAWAMURA

The purpose of this paper is to take a general view of the concept of *conatus* in Spinoza's *Ethica* (1675) and to confirm the characteristic of "necessary self-development"of *conatus*. The first emergence of the word "*conatus*" in *Ethica* is from proposition 6 or 7 in part III (IIIP6 or IIIP7). However, if one interprets the demonstration of "*conatus*"(the effort for self-preservation) in IIIP6 as an argument only from two propositions just before IIIP6, simply from the impossibility of self-destruction of *modus finitus* (and indeed many recent commentators do so), he (or she) would lose another argument which is an important axis for the overall argument of the *conatus* doctrine. In other words, he (or she) would lose sight of one aspect of *conatus* as a proof of the penetration of God's infinite power into all things including human beings, a fact that all things (*modus finitus*) express this God's infinite power through their own *conatus* as an actual essence (*actualis essentia*) and only through that expression can all things exist and act.

So, in this paper, while paying attention to the argument from the impossibility of self-destruction of *modus finitus*, I would like to reconfirm the importance of "another more important argument" which claims that *conatus* has an origin in the infinite power of God. And from that perspective, I determine the characteristic of "necessary self-development"of *conatus* using the process of the latter argument as a key.

Finally, I point out that it is this characteristic of"necessary self-development"of *conatus* that plays a very important and central role in the ethical theory (especially on the possibility or impossibility of altruism) and social philosophy (especially on the problem of socialization or formation of the state).

「キーワード」

自己保存、水平の因果性、コナトゥスの必然的自己発展性、神の無限な力